
雨上がりの空の下

西瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨上がりの空の下

【著者名】

N4847F

【作者名】
西瓜

【あらすじ】

高校一年、スズカワユウキ鈴川結城。同じく高校一年、ヒメノユキノ姫野由紀乃。高校生活をする、普通の高校生。だけど、由紀乃には、男の人気が苦手な訳が…

プロローグ（前書き）

駄文ですが、読んでいただけたら幸いです。

プロローグ

「ねえ、あれから……、どれくらいたつたのかな?…。」
雨が降っていた。

「あなたは、元気?…。私は、元気だよ。」彼女は泣いていた。雨
が彼女の涙を、洗い流していた。
「全部あなたのおかげだよ。ありがとう…。」
緑の丘は星空を、綺麗に映しだしていた。
彼女は笑っていた。

一、鈴川結城

「お前、ホントにすげえな！」

「そんなことねえって…。」

だるい。コイツといふと疲れる。

「あはは」

俺、鈴川結城。

つと、隣のコイツが、竹内直。…。

「コイツが問題なんだよなあ。」

「今日もサッカーで、一試合で4得点…。」

「だから…たまたまだつづーの。」

「ほり~、あんたたち…。」

直の彼女だ…。

2倍めんどい。

「梨佳」

「ちょっと…、ギリギリで宇山高、はいつたんだから、直は勉強しない！」

植野梨佳。お節介女。今日もテンション高え…。

「もう一度言つわよ…、直は勉強しなさい…。」

「うわつ、それ言つくなよ~。」

「俺、だるいから帰るわ~。」

「分かつたゼヒーロー」

「結城君、また明日ねえ。」

よつやく解放された…。

「はあ…。家まで遠いなあ…。」

ホントはそんなんじゃなくて、帰りたくないだけ…なんだよな。

あれ?あれは…。」

門の前にたつてんの…。

同じ一年の…。てか!同じクラスの奴じやん!」

確か…。姫野？…。だっけ。

「まあいいか。」

「ぶ～ん」

「痛つ！」

なんだコイツ？

小学生か。

「あれれ？お兄ちゃん「ゴメンね。」

「ちゃんと前見てあるけよ？」

「はあい」

「あつ！達也！」「

姫野？いつの間に。

「あんた確か…。鈴川君？」

「あ、ああ。」

やべえ、早く帰んねえと。帰りたくねえけど。

「達也、お兄ちゃんに謝った？」

「うん」

「鈴川君、「ゴメンね。」

「いや、いいけど。」

やべえ俺、露骨に早く帰りてえ…って顔してる。

「じゃ、またね。」

「おう。またな。」

てか、初めてしゃべつた…よな。

「バイバイ、お兄ちゃん。」

「またな。」

急げ俺！

「ゼエ…ハア…、た、ただいま…。」「あら、おかれり結城。」

急げ急げ。

「お風呂入つてよ、結城。」

「ゴメン、急いでつから。」

「何よ…、あの子つたら。」

「ふう、間に合つた。」

これが観たかつたんだよ

「ええ、今日の試合は、日本対トルコ。見ものですね。」

「トルコか、日本負けん…」

「コラ！結城！」

「…、何だよ。

て、まさか…。」

「親父！」

俺の帰りたくない理由。怒鳴る親父…。

「母さんが風呂に入れと、言つてるやー早く行きなさい。」

「…。了解…。」

俺の娯楽の時間が…。

一、鈴川結城 2

「ああ、試合終わつちつた。」

親父の命令は絶対。……なんだよな……。

「全く……。」

眠くなつてきたなあ。

「よし！寝るか！」

「結城～、晩ご飯よ。」

行かねえ。親父がきても行かねえ。

寝てーんだよ……。

ギュルルルル……。

結城のお腹は嘘をつかないようだ。

「くそつ！」

ギュルルル……。

「母ちゃん、今行く。」

結城は階段をものすごい速さでかけていった。
二人が初めて会話した日。天気は曇りだった。

「姫野、じゅん！」

「え？」

「何だよ、今日日曜だぜ。」

「鈴川君こそ、私と同じみたいね。」

「違う違う！これは、その……。」

「あ～あ、高校って、土曜日もあるから……、日曜もあるかなあ、つて、勘違いしちゃった。」

俺もだ。

「へ、へえ……。俺は朝のジョギングだぜ。」
(鈴川君の声、震える。ふふ。)

「何だよ、にやにやして！」

「別にい、……。」

「じゃ、俺は帰っからな。」

「私も。」

「ふふ。恥かくとこだつたぜ……。」

「それと、鈴川君？」

「ん？」

「嘘が下手だぞ！制服で、ジョギングする人がいるの？
げっ！バレた……。」

「最初から知つてたなあ……。」

あれ？もう行っちゃつたか。

「何だこれ？」

【姫野由紀乃 1993年6月6日生まれ 音楽部所属 宇山高校

一年B組】

「あつ！ アイツ、これ、学生証じゅん。落としたのか。」

「アイツ、由紀乃つて名前なんだ……。」

「音楽部……か、俺と真逆だな。」

つて、俺も帰んなきや！姫野のせいで時間くつちまった。

「はあ……。」

結城は、走りだした。

三、姫野由紀乃

「なつ、ない！」

私の学生証…。

「再発行…、できないんだよな。」

♪プルル

「電話だ、誰だろ?…、梨佳だ。」

♪もしもし♪?

「♪あつ！由紀乃？」

「何よもう、こんなときにはい。」

「あれ？ふふふ、怒ってる。」

「笑うなあ！」

「学生証のことでしょ？」

！？そ、うよ。それなの！

「梨佳、あなた！いつから超能力に、目覚めたの？」

「結城君が、拾ってくれてたんだよ」

鈴川君が？

「わあ、どうしてだろ？」

「とりあえず、あたし由紀乃ん家に、近いから

「ありがと。外で待ってるね。」

ブツン…

♪プー…プー…

由紀乃も走りだした。

「ゴメンね。」

「いいよ~」

「なんで、私ん家の近く居たの？」

梨佳は、ビシッと一軒の家を指差した。

「あの家が…、どうかした？」

「どうかした？じゃ、ないわよ。あれは直の家！」

「えええ！？近すぎて気付かなかつた。」

これが【灯台もと暗し】かな。ふふ。

「今日は、直の誕生日なんだ。」

「そうなの。じゃ、早く行つてあげなよ。」

「うん そうする。」

「梨佳、ありがとね」

「お安い御用さあ …。」

「ん？梨佳、どうかした？」

「あたしだつて、できたんだから！由紀乃もきっと、できるよ。」

「何が…？」

「決まつてゐるじゃない。…、カ、レ、シ。」

「ええ？私はいいよ…。」

「どして？」

「だつて、…。」

♪ プルル

電話だ…。

「【鈴川結城】…。」

「ふふ。」

「何で！？鈴川君が…、私の番号を。」

「あたしが教えた。」

「また！勝手な事…！」

「まあまあ、恋の相手は、以外と近くにいたりしてね

「もう、からかわないでよ！」

「早くでてあげな～。」

「もしもし？鈴川君？」

「～おつ？学生証、植野から受け取つた？」

「うん…。」

「～よかつた～。」

「ありがと…。」

「～気すんな。じゃ、またな。」

「も～、梨佳つたら…、ま、いつか。」

直の家から、明るい声が聞こえた。

「彼氏なんて、いらないよ…。」

由紀乃は、自分の部屋のベッドに入った。

梨佳いないし…。」

四、姫野由紀乃2

「彼氏なんて、男の人なんて、…。」
「信用できない…。」

由紀乃是、そのまま、眠りについた。

「起きる、起きる、朝だぞ！ わあうん…。」

「うん…、もう、朝かあ。」

「わあうん！」

「ワン太郎ちゃん、もういいよ。」

ポチッ。アラーム機能の、犬（？）型時計が、鳴りやんだ。

「学校、行くぞ」

由紀乃是、家を出た。

キーンコーンカーンコーン

「今日の授業は、終わりだ。」

山田先生、またネクタイ曲がつてる。

「ん？ 姫野、先生の顔に何かついてるか？」

「いいえ」

「やけに嬉しそうだな。先生も嬉しくなるぞ、ワッハッハ。」

「だって、顔じやなくてネクタイだもん。ふふ。

（姫野の奴、今日変だな、元気を装おつてる…つていうか。）

「先生、音楽部、行つてきます」

「そうちそうちがんばれよ。ワッハッハ。」

「はい…。」

（やつぱつ、変だよな…。）

キーンゴーンカーンゴーン

(いつけね！俺もサッカー部…。)

「…。ふふ。そんな昔のこと、思いだして…。私ったら。」

一人は、教室を後にした。

「由紀乃ちゃん？元気ないみたいよ？」

「あっ！佐野先生、私元気ですよ。ね」

「そう…、そうみたいね。」

「由紀乃、風邪でもひいたか？」

あっ！3年C組の、飯田夕美先輩。

「大丈夫ですよ。先輩」

「よつしゃ、その意氣だ。うちら3年も、頑張らないとな。」

「だね、夕美。」

石野遙先輩だ。

「遙も風邪ひくなよ。」

「まるで私が、ひいてるみたいじゃないですか？」

「あれ？由紀乃、ひいてなかつたか。」

「ひいてませんよ～だ！」

「ははは。」

そう、こうやって、男の人なんて信用できないもん、女人と…。

五、クラスメート

キーンゴーンカーンゴーン

「ふあ～、疲れた！」

「これで、帰れるぜ！」

「今日の練習は、終わりだ！」

つたく、顧問の上田、厳しくって……疲れる。

「解散！」

「ありがとう」ありがとうございました！」「

「ああ、また親父に怒鳴られる、かも。」「あれ？ 植野だ。

「アイツなら……。」「

「だからーあたしは、知らないって、結城君？ちよつと、聞いてる

？」

「姫野は、何で元気ないんだよ……。」「

「ちよつと、また聞いてない……。その質問3回目だよ？」「

「……、そうか。悪かったな。」「

「結城君？大丈夫？」「

「あ、ああ。」「

「結城君……は、何で由紀乃のために、そんなに熱くなってるの？」「

「そりや、一応クラスメートだから……、……。」「

「ふうん。」「

クラスメートだから……。本当の気持ちが、別にあるのか？俺は……。

「実はね、由紀乃は、男の人があつと苦手なの。」「

「えつ？」「

「これは、由紀乃に、口止めされてたんだけど……。」「

「苦手って、どんな風に？」「

「近くに居られないって、感じ…なのかな。」「

「俺とは、しゃべってたじやないか！」

「うん…。あたし、直の誕生日の日…、由紀乃に学生証、届けたとき、由紀乃を誕生日に誘わなかつたんだ…。」「ああ…。」

「由紀乃ね、直も、ダメみたいなの。」「…。」

「でもね、結城君だけは、大丈夫みたいなの。」「え？」

「だから…、あなたなら、由紀乃の、心の問題だけど…、結城君なら、少しでも、由紀乃の心の支えになつてくれるかな…、つて…。」「…。」「あたし、思つたんだ…。」

一人は黙つたまま、空を見ている。

雨が降つてきた。

「俺、由紀乃の力になれるか、分からないけど…。」「はいっ、傘！」「

植野梨佳、悪い奴じやないな…。

「行つてくる。」

結城の言葉には、力強さと、優しさがこもつていた。

六、過去

「やつぱり、ここにいたんだな…。姫野。」

由紀乃是泣いていた。

「植野から聞いたぞ。一人になりたいときは、ここにくるって。」

【緑の丘】。この街全体を見渡せる、丘を街の人は、そう呼んでいる。

「何で…？私とあなたは、他人じゃない…。何で私のために、こんなところまで…、くるの…？」「それは…、俺たちは、クラスメートだ。隠し事なんかしないで、嫌な事があるなら、言ってみろよ…。」

「あなたに言って、なんになるのよ…。」

「…俺からは、逃げないんだな…。」

「え？…。」

結城は、由紀乃の隣に座った。

「ほら、姫野…、お前、男が苦手なんだって？」

「梨佳から…、聞いたんだ…。」

由紀乃是、荷物と楽器を右に寄せた。

「綺麗だな…、ここから見る空は。」

雨は、止んでいた。

「うん…。」

結城の気持ちと、由紀乃の気持ちは、今、一つになっている。

「私ね、入学式の時から、鈴川君は、今までの人と違う…、人だと思つてたんだ。」

「…。」

「私ね、小学校の時、いじめられていたの…。」「えつ？…。」

「それでも、友達もいたし、耐えられる。つて、思つてたの。」「空の星が、一層強く、光つた。」

「でもね、日に日にエスカレートして…、耐えられなくなつて…、

「私、死んじゃおつかなつて…。思つたんだ。」

10

結城は、自分の気持ちに、気付きはじめていた。

「すると、一人の男の子がね、私を庇ってくれたの……」

「由紀乃をいじめていた、奴らも男だな？」

由紀乃は、泣いてはいなかつた。涙が枯れてしまつた

がな
い。

「その異

めを受けたの……。」「

由紀乃は立つた

「でね、その男の子に、ありがとうって伝えようと……」

由紀乃は前に進む。

「おい、姫野？」

そしたの 次の日に 男の子… そのしめをして いた… 男の子

卷之三

卷之三

如里

三部和のせり

お前は、それで、男か？

小さな雨の滴が 一人を濡らす

でもね、結城君、あなたはね、あの男の子みたしなんだ。

三

優し
優し

— あ、ごとく…

「おい！ ちむか」

由紀乃の体が、結城の視界から消える。

七、想い

星空は、輝きを増していた。

【緑の丘】は、今日も優しく、街を見渡す。
優しく…。

「うう…、うわあああん…。」

「ハアハア…。」

「何で！？何で助けるのよ…！」

「勝手な…、事、するな、ハア…。」

「うう…。」

「俺は…、植野に頼まれたんだ。」

結城は自分の気持ちに、気付いていた。「由紀乃の、心の…、支えになつて…。」

雨が強くなる。

「そう、頼まれたんだ。」

由紀乃是、俯いたまま、泣いている。

「こんなに想つてくれる、友達がいるんだ。お前は、一人じゃない。お前は何も悪くないんだ。」

「私…、入学式に、周りに男の人…、いっぱいいて…、思いだしちやつて…。あの、怖い感覚を…。」

「なあ…、由紀乃。」

「あれ？…。姫野じやないんだね。」

「これからは、由紀乃のこと、俺が守っちゃダメかな…。」

由紀乃是泣き止んでいた。

「私、こんなに…、嬉しい気持ち、知らなかつた…。」

由紀乃是右手の、荷物の中から、ウ、アイオリンを取り出した。

由紀乃は、ウ、アイオリンを弾きはじめた。

「綺麗だ…。この夜空よりも…。」

その音色は、どこまでも…、どこまでも、響き渡った。

それは、雨上がりの空でのき事だった。

「由紀乃、好きだ…。」

結城は、自分の方へ、由紀乃を引き寄せると、やがて深いキスに…、二人の時間は止まっていた。

「帰るか。」

「うん。」

一人は、この日はじめて、自分の気持ちに向き合ひつことができた。

由紀乃是、自分の過去に打ち勝つた。

由紀乃是幸せだった。そう…、今は…。

♪ プルル

「もしもし？俺だよ。由紀乃？」

この電話から、物語は、大きく傾くことになる。

八、その時…

「私、どうしていいか…、分からな…よ…。」

「意識が、回復しません！」

「声をかけてあげて下さい…！」

「なあ…、皆来てるぜ、起きひよー！」

「…君…起きて！」

「起きてよ、また笑つてよ、結城！」

……

……

……

【あの日】から、数ヶ月後…。

♪ プルル

「もしもし？俺だよ。由紀乃？」

由紀乃是、慌てた様子でいる。

「もしもし…？結城？」

「何か用なら、メールすればいいの…。」

？

「聞こえねえよ？由紀乃？」

「今何て言ったの？由紀乃？」

「た…やが…。」

「由紀乃、落ちついて、話でみて。」

「達也が…、達也が！肺炎を起こしたの！」

「なん…だつて？」

【岩井達也。由紀乃の、いとこに当たる。持病の喘息を持ち、現在は小学生。】

「その達也が、肺炎で、命に関わるんじや…。」

「わあああん…！」

由紀乃の泣き声が、聞こえる。

「分かった…。場所は何処だ？すぐ行く。」

「ううう…東…山の…病院。」

結城は、自転車で、走りだしていた。

「くそつ…どけえー！」

街中の人混みを、抜けて行く結城。

「早く変われ…。」

今の結城には、信号すら、苛立ちの種になつている。

「変わつた。」

信号が変わつた…。

「急げ。急げ。急げ。」

何かのデータが、インプットされたかのように、結城は走つていた。

ブブブー！！！

大型トラックの、クラクションが、道路中に、響き渡つた。

鈍い音とともに…。

結城の携帯の画面には、
【達也は落ちついたよ…。よかつた。】
b y由紀乃
と、映しだされていた。

九、それから

……ドクン……

ここは、どこだ……？

俺は……、誰だ……？

思い出せ……。思い出せ！

誰かが呼ぶ声が……、聞こえる。

「……！起よ……！」

「……結城！」

そうか、俺は……。

全部、思いだした。

ここで、こんな真っ暗な……、ところで、寝ている場合じゃない……。

守らなくちゃ、いけない人が、いるんだ。

俺の身体……、言つことを聞け！
何でだ……。

身体が、言つことを聞かない……。

声が、段々遠くなっていく……。由紀乃……。

……ドクン……ドクン……
……ドクン……ドクン……
……ドクン……ドクン……

ドクン

「結城いい！！！！！！！！！」

「御臨終です。」

「うわああああああああああああわああ！」

「何で……、何でだよ。」

「結城君、……。嘘……なんでしょう……？」

この夜、由紀乃だけが、結城の傍を離れず、一生で最大の量の涙を、流した。

そつ…まるで、そじ雲が降ったよつ、たん。

それから、数年後。

「ねえ、見て。お母さん。」

「なあに？結衣？」

「今日も、あのお姉ちゃん、彼処に座つてゐる。何してゐのかな～？」
「人は、皆ね、辛いとき、嬉しいとき、悲しいとき、楽しいとき、

あんな風にするんだよ。」

「ふうん。あんまり分かんないや。行く、お母さん。」

梨屋、またここへきてたのか。

直
うん

「あれれ？お母さんも、お父さんも、みすてりいな感じだね！」

「また結衣、じいじがそんな言葉、覚えたの？」

「そ。」

二二

「行けりうか。
梨佳、そっとしておこへ、あづみ。」
「そうね…。」

Hプローグ

「ねえ、結城。あれから、どれくらいたつたのかな?」
由紀乃是泣いていた。

鈴川結城。そう書かれた墓には、暖かい雨が、降っていた。
「結城がいなくなつて、私大変だつたんだよ。ふふ。」
空から雨が落ちる。

「今、梨佳と直は、結婚して、ちょっと羨ましいな。つて、思うこともあるんだ。」

「結城のせいだぞ。ふふ。」

「結城のお父さんも、お母さんも、大変だつたみたい…。」

「昔の、音楽部の先輩たちは、有名な音楽家になつちやつた。」

「あんたのいた、サッカー部も、地道に今でも、宇山高校サッカー部。として、頑張つてるみたい。エースストライカーが、いなくなつたらダメじやない…。」

「達也も、大きくなつたんだよ。」

「…うう…。」

「ゴメンね…。結城…、私のせいで…。」

由紀乃が言い終わると、風が吹いた。優しい風が…。

「でも、やっぱり、あなたに一番伝えたいのは、ありがとう。かな

…。」

「私ね、今、男の人怖くないよ。」

暖かい雨と、空からの雨。

止んでいた。

「全部、ぜんぶ、ぜーんぶ!」

「あなたのおかげだよ…。」

「あなたが、ここで、私を助けてくれた。あなたが私の過去を、変えてくれた。あなたが…。」

今日も、【緑の丘】は、優しく、美しく、夜空を映していた。

雨上がりの空の出来事だった…。

「由紀乃

何泣いてんだよ。」

由紀乃是振り返る。

何もなかつた…。

由紀乃是、確信していた。

「結城…。」

由紀乃是、ウ、アイオリンに手を伸ばす。

H&Rローグ（後書き）

最後まで、読んで下さった西田君、本当に、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4847f/>

雨上がりの空の下

2010年12月18日03時41分発行